ピロ貴子

JOSHIBI no.201

ピロ貴子（ぴろ・たかこ）
シューズデザイナー。女子美術大学芸術学部 デザイン科 造形計画専攻（現在のプロダクトデザイン専攻）卒業。卒業後はイタリアに渡り、靴づくりの名門校「ARSUTORIA School」で学ぶ。同校で知り合った仲間とスペインでシューズデザイン会社を設立。帰国後、自らの名前を冠したブランド「KAROLINE by TAKAKO」を立ち上げた後、育児のために米国に移住。世界的なセレブリティを顧客に持つブランドでデザイナーとして働くかたわら、2015年に自らデザイン・制作・販売を手掛けるブランド「Circle3.nyc」をスタート。

人を楽しませるために、いくつになっても作り続けたい。

20代で日本を飛び出し、
本場・ヨーロッパで靴づくりを学んだ
シューズデザイナーのピロ貴子さん。
40歳を過ぎ、子育てをしながら
独力でブランドを立ち上げるなど、
エネルギッシュな活動を続けています。
そのもの作りへのモチベーションは、
女子美時代から変わらないと語ります。

Photo Masa Hamanoi　Text 株式会社フリッジ

ニューヨークに住んで12年、シューズデザインを仕事にして30年になります。祖父が興した「銀座ワシントン」を営む家に生まれたものの、幼い頃はもの作りより外遊びに夢中でした。女子美に通ったのは中学から大学までの10年間。入学のきっかけは、塾の友達に女子美祭に連れられたことです。生徒一人ひとりのキラキラした姿を見て「人を喜ばせることが彼女らのエネルギーになっている」と感じたことを覚えています。地元の公立中に通うつもりだった私は、その日を境に女子美一筋に。学祭に連れてくれた子とは今でも親友といえる間柄です。

　中学・高校時代は、それはもうノビノビとした毎日で、先生ともすごく仲が良かった。みんなで職員室にドカドカと入っていったり、大きな声でしゃべったり。女子美には、あらゆる個性を受け入れる大らかな雰囲気があったように思います。大学では、新設された芸術学部デザイン科造形計画専攻（現在のプロダクトデザイン

専攻）の一期生に。その卒業制作ではシリコンを使ったゼリー状の棚を作りました。棚といえば木製か金属製が常識でしょうけど、異素材を用いて挑みたい気持ちがあったのです。私は大学で靴作りを学んだわけではありませんが、この経験は現在シューズデザインをする上でも大いに活きています。例えばハラコ（毛を残した成牛の革に、染色して柄をつけた革）を用いたローファーのアッパーに、EVA素材の厚底ソールをつけ、靴の内側にはアメリカンコミックのキャラクターをあしらう。そうすると新鮮な造形になるだけでなく機能的でもあり、気持ちを高める一足にもなる。何かユニークな組み合わせから新しいアイテムを生み出していくことは常に意識しています。それに自らの発想で人を楽しませたい。これが私の原動力です。女子美時代から今に至るまで一貫しています。

　卒業後は、すぐに家業に入ることも考えましたが「靴のデザインをするなら本格的に学んでからにしよう」と靴作りの本場イタリアへ。ミラノにある靴制作の専門学校で技術を身につけた後は、ベテラン靴職人のもと2年ほど住み込みで働きました。スペインに居を移して仲間とデザイン会社を立ち上げたり、自社ブランドを始めたりと、振り返ってみると実に濃密な20代を送ったものです。

　日本に本帰国してからは、フリーランスのシューズデザイナーとして色んなブランドに関わりました。その中で知り合った会社とのご縁から、ダブルネームで「KAROLINE by TAKAKO」を立ち上げる幸運に恵まれます。自分の名前を冠した初めてのブランドです。これを有名デパートやバーニーズニューヨークなどで扱ってもらえたのは幸運だったとしかいいようがありません。サンプル制作のたびに日本とヨーロッパを往復する生活を送っていた30代は、たくさんの仕事に恵まれました。そんななかで結婚をし、二人の子宝に恵まれます。第一子の出産直前まではヨーロッパにいて、出産後もベビーカーを飛行機に乗せて海外出張していましたが、子の成長とともにそれも難しくなり、第二子の出産を機に育児に専念。夫がアメリカ人ということもあり、子どもの教育環境を考えアメリカへの移住を決めます。ニューヨークを選んだのは、私のたっての希望でした。ニューヨークは何度も旅した大好きな街。「あの街でデザイナーとして働けたらいいのに」という思いもありました。

　移住して1年が経った頃、転機が訪れます。ある靴のエキシビションを訪れたところ「Made in NY」を掲げるブースが目に留まったのです。興味津々でブースの出展者に話しかけると、私の経歴に関心を寄せてくれたので、後日工房を訪問。木型を使ってその場で靴をデザインすると、即座に採用が決定。こうして「Modern Vice（モダンバイス）」というブランドで働くことになったのです。

　モダンバイスでは、ビヨンセやレニー・クラヴィッツといった世界的なセレブリティが履くシューズをデザインする機会もあり、大きなやりがいを感じていました。ニューヨークでの刺激的な生活にも充実感がありました。それでも、やっぱり自分のブランドを持ちたい。そんな想いが募ってきたのです。ブランドの構想を練ったのは、ママチャリに子ども二人を乗せて保育園へと走る道中です。自分の生活にフィットすることが大前提で、雨でも履けて、自転車にも乗れて、走れるもの。それでいてニューヨークの街並みに合うおしゃれな靴。ふと、今まで自分

がデザインしてきたような高級マテリアルを用いたアッパーに、抜け感をもたらすオールドスクールな白ソールをつけたイメージが浮かんだのです。コンセプトは「More Than Sneaker」。動きやすいだけでなく、コーディネートの主役にもなるシューズです。ブランド名は、ワシントン靴店の3代目としての思いや創立者の祖父たちへの尊敬と感謝を込め、家族の家紋〝丸三〟を英語にして「Circle3.nyc」に。ブルックリンにアトリエ兼ショップを設け、お客様に直接想いを届けるべく私も店頭に立ちました。40歳を過ぎてからのチャレンジには不安もありましたが、やりたい気持ちの方が勝っていましたね。幸運なことに同じビルのテナントにはMTVやネットフリックスのスタジオがあり、ショップに来た有名ラッパーのニック・キャノンや、マーヴェルシリーズの作品で主演を務めたマイク・コルターらがシューズを番組収録中に履いてくれたのです。そんなニューヨークならではの出来事のおかげでブランドの知名度はグッと高まりました。銀座ワシントンを通して日本でも販売しました。ありがたいことに「貴子さんの靴を一度履くと、ほかは履けない」という声を頂くこともあります。自分のブランドが有名セレブだけでなくブルックリンのママ友、女子美卒業生コレクターなど幅広い人たちから支持されてきたことには誇りを感じています。

年齢的には、私も人生の後半戦に差し掛かってはいますが、まだまだやりたいことは尽きません。近い将来、海外で店舗を持つ構想もありますす。作り手としての経験に、生活者としての知見を掛け合わせると、どんどんアイデアがわいてくる。若い頃の勢いのあるもの作りも楽しかったけど、この年齢ならではのもの作りもあります。それがこの仕事の醍醐味です。年齢を重ねることはハンデではなく強みになる。感性は、年齢によって衰えるのではなく磨かれると実感しています。それに私の作品を待ってくれる人がいる限り、靴作りを止めるつもりはありません。いろんな経験をしてきましたが、女子美祭で衝撃を受けたあの日から今に至るまで、私の本質は何ら変わらないのです。結局、私はいくつになっても、人を楽しませることが好き。きっと、骨の髄まで女子美生なのでしょうね。

https://circle3.nyc/

新入生に向けて

01

学校法人女子美術大学
理事長　福下 雄二

新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。心からお慶びと歓迎を申し上げます。

本学は、今年2025年に創立125周年を迎えた、私立の美術大学としては最も古い歴史と伝統を誇る大学であり、皆様はこの創立125周年という記念すべき節目の年に入学されました。

創立以来「芸術による女性の自立」という建学の精神の下、女性のための美術教育にまい進し、あらゆる世界で活躍する数多くの卒業生を輩出してまいりました。

これからは、皆様の新しい力によって一層輝かしい歴史と伝統を築き上げていっていただくことを期待しております。

これからの大学生活では、それぞれの学科や専攻領域において研鑽を積まれますとともに、良き先生に巡り会い、良い友人に恵まれるよう努力していただき、充実した実り多い大学生活を送っていただきたいと思います。

女子美術大学
女子美術大学短期大学部
学長　小倉 文子

新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。

1900年に創立した女子美術大学は今年、創立125周年を迎えます。〝芸術による女性の自立〟〝女性の社会的地位の向上〟〝専門の技術家・美術教師の養成〟を建学の精神として創立し、これまでに多くのアーティストやクリエイターを輩出すると同時に、起業する卒業生も多く、職種も多岐にわたります。考える力、生きる力を身に付け活躍の場を広げた結果といえます。

学生生活は学科専攻領域を越えて自由に参加できる産官学連携プロジェクトや異分野と協働で行うプロジェクトが多数あります。また、海外で行う研修や留学制度なども充実しています。行動することでたくさんのモノと出会い、たくさんの人とつながります。正課授業で習得する知識や技術に加え、正課外のプロジェクトに参加することで出会うモノやコトを最大限活用し、社会とつながり、学科を越えた仲間たちとともに体験を通して成果を上げられることを期待しています。

短期大学部部長
佐藤 真澄

芸術学部長
清水 美三子

大学院美術研究科長
奥山 亜喜子

副学長
後藤 浩介

副学長
松本 博子

新任教員からみなさんへ

02

日髙杏子　Kyoko Hidaka
芸術学部 共通専門 特任教授

東京生まれ。東京藝術大学大学院博士課程修了。多摩美、芝浦工大などを経て現職。著書に 'The Art of Color Categorization' (Palgrave Macmillan)、『色を分ける 色で分ける』(京都大学学術出版会)、訳書にマンセル『色彩の表記』(みすず書房)、アルバース『デザインについて』(白水社)など。

最近、翻訳絵本『色がきこえるおんなのこ』(玉川大学出版部)を上梓しました。この絵本は、色聴を持つ女の子が、自分に見える色について話しただけで周囲から笑われてしまう物語です。ネタバレ防止のため、結末はぜひ本書を読んでご確認ください。私は、唯一無二の自分の世界を表現し続けることが、抑止されたり、蔑まれたりする世の中は避けたいな、と常に感じています。現実社会では、自分の考えや、やり方が少しでも違うと、さまざまな障害に直面することもあります。私は色彩学者として色彩やデザインに魅了され、研究と教育と表現を諦めずに続けてきました。そして、2025年から女子美術大学で教えることになりました。自分の世界を表現したい人々を、微力ながらもこれからも応援していきたいので、みなさま、よろしくお願いいたします。

冨安由真　Yuma Tomiyasu
芸術学部 美術学科 洋画専攻 特任准教授

現代美術作家。ロンドン芸術大学Chelsea College of Arts のFine Art専攻にて学部と修士を学んだ後、2017年に東京藝術大学にて博士号(美術)取得。主な展覧会に個展「影にのぞむ」(原爆の図丸木美術館/2023年)、「瀬戸内国際芸術祭2022」(豊島/2022年)、個展「アペルト15 冨安由真 The Pale Horse」(金沢21世紀美術館/2021-22年)、個展「漂泊する幻影」(KAAT神奈川芸術劇場/2021年)など。その他、国内外で個展・グループ展多数、受賞歴多数。

私たち人間は皆、人生の探究者です。正解のない道を歩きながら、迷い、つまずき、時に何も見えないなか手探りで、歩き続けています。芸術というものは、そんななかで、灯のようなものだと私は思います。遠くまで照らし出すサーチライトのようなものだったり、足元を照らすランタンだったり、あるいはマッチの火のようなもののこともあります。私たち人間が、人の世を少しでも知ろうと、理解しようと、良くしようと、生み出してきたものだと思うのです。皆さんの人生がより良きものになるように、芸術が寄り添ってくれるものであってほしいと願います。女子美術大学で学ぶなかで、皆さんそれぞれが芸術に対する向き合い方を見つけてくれると良いなと思います。そして願わくは、それを社会に還元してほしいです。そのお手伝いを、是非させてください。

重政周平　Shuhei Shigemasa
芸術学部 美術学科 日本画専攻 特任講師

東京生まれ。日本画家。東京藝術大学大学院博士後期課程絵画専攻日本画研究領域修了。第46回創画展創画会賞受賞(2021年第48回、2022年第49回 同賞)、Seed山種美術館日本画アワード2024 優秀賞受賞。東京藝術大学絵画科日本画専攻教育研究助手、女子美術大学日本画専攻非常勤講師を経て、現在に至る。一般社団法人創画会正会員。個展・グループ展等で作品を発表。

女子美術大学大学院博士後期課程修了後、女子美術大学での日々は、様々な価値観や体験を知ることができる貴重な期間です。そこで得られるものは創作においての発想に繋がってもいき、自分の考え方にも大きく影響していきます。また、美術表現は答えがない道でもあるため苦悩や挫折が多くあるでしょう。しかし、その経験が表現を深めて自身の成長のきっかけとなります。そういった課題を少しずつ乗り越えていくことで楽しさや感動を得ることができていきます。現状のみなさんはスタートラインに立っている状態でもありどの方向に進むのか、その手助けを教員という立場で一緒に探していければと思っています。また、私もみなさんから新しい感性や考えを学ばせてもらえることを期待しています。どうぞよろしくお願いします。

山口レイコ　Reiko Yamaguchi
芸術学部 アート・デザイン表現学科 メディア表現領域 特任教授

筑波大学大学院デザイン研究科総合造形専攻修了。アートユニット「パーフェクトロン」の名義で映像制作や展示企画、作品制作など多岐にわたる創作活動を展開している。代表的な参加作品は、NHK Eテレの教育番組「デザインあ」、そのコンセプトを体現した展覧会「デザインあ展」など。

これからの未来を担う人達に必要なのは、新しい感性とアイディア、そしてそれらを伝える力だと思います。新しい感性を磨くためには、過去も知っておかないといけないし(そうでないと新しさも自覚できないからね)、アイディアに説得力を持たせられるのは、様々な自分自身の経験だし(頭で考えただけだとすぐバレちゃうからね)、伝える力を培うには、いろんな人と関わりを持つ必要があります。この3つに加えて、失敗すら面白がれるメンタルがあればかなりいい感じ。実は上記すべての経験を積めるのが大学4年間だと思うのです。大学時代に気づかなくて今悔しい私がいうんだから多分間違いないです。仲間もいて時間もたっぷり、そこそこの失敗してもノーダメージ、大学素晴らしくないですか?とにかく全てを面白がって、トライアンドエラーを繰り返してみてください。

西村愛子　Aiko Nishimura
芸術学部 アート・デザイン表現学科 ヒーリング表現領域 特任准教授

東京芸術大学先端芸術表現科で学部から大学院まで現代美術を学び、2014年に博士号(美術)取得。駒沢女子短期大学の幼児造形の教員として11年間勤務。2019年からはアートチーム「みんぐるりんご」を結成し、子ども向けのワークショップやSTEAM教育プログラムの開発、空き家を利活用した地域の居場所運営など、多様な活動を展開している。

周りから少しはみ出してしまうような個性も、アートはやさしく受け入れてくれます。私自身、10代の頃にアートを通じて「ここが自分の居場所だ」と感じたことが、今の道につながっています。違いを認め合える、居心地のよい場所。みんながそれぞれの「好き」や「面白い」に真剣に向き合い、隣にいる誰かの感性に刺激を受けながら過ごす毎日。それが美大の魅力であり、わくわくが自然と伝わってくる空間です。私は今でも、そんな空間が大好きです。ここにいられること、そしてここで仕事ができることを、心から幸せに感じています。皆さんも、大学の友人や先生方、助手さんたちからもたくさんの刺激を受けながら、自分だけの表現を育み、思いきり制作に取り組む時間を楽しんでください。

洞野志保

SLOVAK REPUBLIC

スロバキアを拠点に絵本作家・版画家として活動している卒業生の洞野志保さん。日本でもスロバキアや東欧の民話の再話絵本を数多く出版されています。新作絵本『みっつのふえをもらったヤーノシュ』（福音館書店、ことものとも2月号）の発売を記念した原画展「洞野志保個展［みっつのふえをもらったヤーノシュ］」（表参道・Pinpoint Gallery）のために日本に一時帰国されていた洞野さんに、女子美時代のことやスロバキアや日本でのお仕事についてなど、お話を伺ってきました。

Q1 スロバキアで活動するようになったきっかけは？

スロバキア出身のアーティストであるドゥシャン・カーライ先生に師事するために、女子美卒業後にスロバキアに留学したことがきっかけです。カーライ先生は東欧を代表する絵本作家として、世界中で絵本を出版しておられます。私自身、先生の作品がとても好きで、大学卒業後はスロバキアのカーライ先生のもとで学ぼうと決めていました。在学中からスロバキア語を学び始め、ブラチスラヴァ美術大学版画科のサプリメンタルコースという実技に特化したコースに入学し、カーライ先生のもとで2年間学ぶことができました。ブラチスラヴァ美術大学は、カーライ先生の母校でもあります。当時は2年間で修了したら帰国するつもりだったのですが、途中で夫となる人と出会ってしまいまして、そのまま残ることになりました。ですので、スロバキアで活動し始めたのは、単なる偶然のようなものです（笑）。

Text 株式会社TURBAN　Photo 吉濱篤志　撮影協力 Pinpoint Gallery

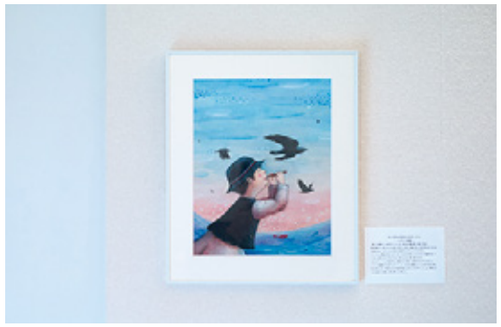
洞野 志保（どうの・しほ）
1977年北海道生まれ。絵本画家・銅版画家。小樽市の版画教室にて銅版画を学ぶ。女子美術大学美術学科洋画・版画コース専攻。2004年、スロバキア共和国 ブラチスラヴァ美術大学に留学。版画学科サプリメンタルコースに在籍し、ドゥシャン・カーライ教授に師事。現在、ブラチスラヴァにて版画、絵本を制作している。主な出版物に『まるきのヤンコ』（スロバキア民話再話絵本 こどものとも年中／福音館書店）、『ターニャちゃんのスカート』（子どものとも年中／福音館書店）、『きつねんどん』（ハンガリー民話再話絵本／ビリケン出版）など。

Q2 女子美を選んだ理由は？

高校生の頃は、美術は好きだけれど、自分がどんな表現をやりたいのかわからずにいました。いざ大学受験となって美大を受験したのですが不合格となってしまい、そのまま3年くらい地元の北海道でフリーターをしていました。

版画との出合いは、まさにそのフリーター時代でした。小樽のギャラリーに版画の展示を見に行った際に、そのギャラリーに併設されている版画教室を見せていただいて。「面白そう」と、しっくりきたんです。教室に通い始め、やるほどに面白くなっていきました。「ずっとやっていたい」と思えるものにやっと出合えたような……。もっと本格的に学んでみたいと、改めて美大受験を考え始めました。

ちょうどそんな時、地元のアーティストの方とおしゃべりする機会があり、大学に行くメリット、行かないメリットについて話を伺ってみました。すると、ある一定期間、絵のことだけに集中するというのはとても大事だし、大学でできる仲間は後々の支えにもなるはずだよとアドバイスをくださいました。確かにそうだなと思いました。働きながらの制作では時間が限られてしまうことはよくわかっていましたし、両親も賛同してくれたので、一念発起して美大受験に再挑戦。女子美は版画コースが開設されており（現 洋画専攻版画コース）早期から集中して版画を学べる環境があったことから選びました。



Q3 女子美時代はどんな学生でしたか？

ずっと工房にいたと思います。働いてしまうと制作にかけられる時間が本当に少なくなるということは身に染みてわかっていましたから、「こんなに素晴らしい場所があり、時間もあるのだから目一杯使い切らなければ！」と、とにかく工房に住みついていましたね（笑）。

Q4 女子美時代の印象深い思い出は？

実は2度目の大学受験の時は、女子美と一緒に他大も受けていました。結果的に合格したのは女子美だったのですが、その後、在学中に大学版画展に出品した際に、その大学の学生作品もじっくりと拝見できる機会がありました。ですが、どの作品もどこか似たように見えてしまったのに対して、女子美はみんなすごく、それぞれなんですよね（笑）。すごくいいな。私、女子美で良かったなって、その時に改めて思いました。女子美の人たちって、いい意味でアグレッシブじゃないというか、誰かと比べたり競争したりするのではなく、自分の好きなことをそれぞれにやっている感じが、私はとても好きでしたね。

Q5 現在の作風は女子美在学中に確立されていたのですか？

女子美時代の作品は今とはけっこう違っていたと思います。もっと版画らしい、アカデミックな作品を制作していたように記憶しています。でも、それと並行して小さな作品はイラストっぽいものを制作していました。

Q6 女子美時代の経験が今につながっている実感はありますか？

在学中にいろいろな版種を経験できたのは良かったです。私は銅版画が好きで、2～3年生の頃は銅版画を集中的にやっていました。でも卒業制作で選んだのはリトグラフでした。設備がないと取り組むのが難しい版種ですから、知っておきたい、学んでおきたいと思ったんです。結果的に自分の表現の幅を広げることにつながりました。さらにスロバキアでは、日本では試したことがなかった石版を使用したリトグラフのさまざまな技法を学びました。

それからもう一つ、在学中に友人の勧めがあり、学外のギャラリーの公募展に出品したことがあったのですが、そこでのご縁は今でも続いています。大学の中では集中して思う存分に作品を制作し、学外でつながりを作っていけたのはとても良かったです。学び制作することだけに集中できた女子美での4年間は、私にとって本当に素晴らしい時間でした。

Q7 普段はどんな活動をしていますか？

首都のブラチスラヴァ郊外で暮らしているのですが、アトリエでは絵画・版画の教室を開いています。出版やイラストレーションの仕事は、実は日本の方が多いです。最近はオンラインでも打ち合わせができ、どんどん日本の仕事がやりやすくなっています。日本で出版する時は、できるだけスロバキア・東欧の文化を紹介できる作品をと思っています。日本の子どもたちが、異なる文化に触れられる機会になったら嬉しいです。

Q8 スロバキアの魅力は？

とても素朴な国で、自然が多いことでしょうか。スロバキアは国の人口が500万人程度と、とても小さな国です。首都の規模も非常に小さく、私が住んでいる場所は首都ではあるけれど鹿や猪が出てくるようなのどかな街です。東京と比べて情報も少ない、スロバキアの静かな環境が私にはすごく心地いいです。あとは、スロバキアの人たちのフラットな関係性も魅力に感じています。年齢や経験によるヒエラルキーのようなものがあまり強くなく、どんなに年齢が離れていようと、作家同士仲間のような感じで付き合ってくださるのは、すごくいいなと思っています。

Q9 スロバキア民話を絵本にし始めたきっかけは？

ブラチスラヴァ美術大学に在籍していた時に、民話を読んでイラストレーションを描くという課題が出されたことがありました。その時に初めてスロバキア民話をいろいろ読んで、とても面白かったんです。楽しいというよりは、ちょっとグロテスクでバイオレンスなものも。日本語にすると「怒ってますか？」というタイトルの民話もあったりして（笑）。ぴっくりするような話でしたが、その不思議さに魅力を感じました。その課題制作をきっかけに、スロバキア民話をもとにした作品を作るようになりました。

Q10 制作する上で大切にしていることを教えてください。

その時、自分が描きたいものをできるだけ正直に描くことです。自分らしさのようなことはあまり考えたことがありません。なぜなら、どうしても〝らしさ〟って絵に出てしまうものだと思うので。自分が見て感じたことが、循環していくといいな。そういう気持ちで制作しています。

Q11 制作に煮詰まった時のリフレッシュ法は？

友人や夫と話すことでしょうか。あとは、近くの森やドナウ川の畔を散歩することです。自然の中を歩いていると、モヤが晴れたように頭の中が整理できます。また、自然の中で出会う動物たちが作品のモチーフになったりもしています。

Q12 やりたいこと、夢を実現するためのヒントを教えてください。

やっぱり諦めないこと、辞めないことだと思います。人生の中で、活動を続けるのが困難になるような状況は、誰にでもきっとやってくるものだと思います。でも、やりたいことや叶えたい夢があるのであれば、いったん活動が下がったとしても、諦めさえしなければ必ず先につながると信じていてほしいなと思うんです。そう信じて人とつながっていけば、いつか必ず自分の助けになる時がきます。続けていれば叶うって、私は思っています。

Q13 女子美生にひと言メッセージをお願いします。

女子美生の皆さんに思うことは一つです。そのままの個性で突っ走ってほしいです！

企業で働く、そんな未来。

Vol.07

日本中の生活のそばにある商品に、携われる嬉しさ

誕生から25年も愛され続けるロングセラー「激落ちくん®」シリーズをはじめ、生活にまつわる多種多様な商品を展開しているレック株式会社。今回は、同社の静岡企画部でグラフィックデザイナーとして活躍している卒業生の小野薫さんに、女子美時代のことや就活のこと、現在の仕事のことなどをじっくりお伺いしました。

レック株式会社
静岡企画部　GD課
小野 薫 さん
芸術学部 デザイン・工芸学科
ヴィジュアルデザイン専攻
2023年3月卒業

レック株式会社

1979（昭和54）年創業。家庭用品、日用品、化粧品、医薬部外品、キャラクター商品など、さまざまな分野の商品を取り扱う総合メーカー。ホームセンターやドラッグストア、100円ショップなど身近な生活の中で、誰もが一度は手に取ったことのある魅力的な商品群の、開発・製造・販売を行っています。
https://www.lecinc.co.jp

デザイナーへの漠然とした憧れ

小学校の頃、県の絵画コンクールに選抜されたのが嬉しくて、もともと好きだった絵がさらに好きになり。絵の具や色に積極的に触れるようになりました。美大進学を考え始めたのは高校2年生の頃です。デザイナーって格好いいかも、という漠然とした憧れからでしたが、先生にも背中を押していただき、そこから美術部と画塾で本格的に勉強し始めました。当時、中高一貫の女子校に通っていたので、大学は共学もいいかなと迷っていました。でも、女子美生や卒業生の方の個性豊かな作品に共感したことと、自然に囲まれた女性だけの、のびのびした環境でゆっくり感性を伸ばしていけそうだなと、女子美に決めました。

コロナ禍の逆境にあった大学時代

大学2～3年生の頃は、新型コロナウイルスの感染拡大によって、授業がすべてオンラインに切り替わり、学習環境が大きく変わりました。校内の設備が使えず、先生や友達とコミュニケーションも取りにくくなり、戸惑いやもどかしさを感じる日々が続きました。当時、女子美の相模大野の宿舎に暮らしていたのですが、宿舎の仲間の存在が大きな支えになっていました。一緒に授業を受けたり、作品を共有したり。そういう友達がすぐそばにいてくれたから、逆境のなかでもモチベーションが途切れることなく、限られた環境のなかで作品づくりに没頭することができました。部屋中を絵の具まみれにして制作したり、ある時は課題制作のために部屋中が輪ゴムまみれになったりも（笑）。また、制作した作品も実際に見てもらえない状況下。画面越しでも伝わる見せ方にこだわって試行錯誤をしたり、オンラインだからこそ積極的に質問や発言をしたりするなかで、特殊な授業環境だったけれど、プレゼンテーション力も身につけられたと思います。

消費者のそばにあるデザインを

就職活動を始めた時期は実は遅めで、大学3年生の3月でした。周りの友達から就活の話が出始めて気づいて焦りました。周囲はデザイン事務所志望の人が多い印象でしたが、私は企業デザイナーを志望していました。授業などを通じて、広告媒体よりも生活者の身近にある日用品に携わりたい気持ちが強くなっていたんです。家族も手にとってくれるような、身近なデザインがやりたいって。まだ大学はオンラインまっただ中でしたが、大学からの呼びかけもあり、初めてキャリア支援センターに足を運びました。そこで教えていただいたのが、今働いているレックです。ほかにも何社か受けたのですが、他社ではオンライン面接が基本でしたが、レックだけはすべて対面面接。最終面接では、社長や取締役も話を聞いてくださり、真摯に向きあってくださることに感動しました。作品はもちろんですが、〝人〟を大事に見ている会社なのだなと感じました。実際に働いてみても、皆さんの人柄の良さがこの職場の大切な魅力だと実感しています。どんなに質問をしても、嫌な顔一つせず優しく教えてくださる先輩たち。女子美出身の先輩も多いですし、安心感もあります。先輩後輩問わずとにかく仲がいい職場で、休日にみんなでドライブに行くこともあります。

デザインや商品が形になる喜び

私が在籍している静岡企画部では、主に100円ショップ向けの商品を企画開発しており、入社1年目から商品づくりにイチから関わることができます。グラフィックデザインの仕事では、商品の柄のデザインやパッケージデザインが主ですが、自分がほしいものや、こんな商品があったら便利かも！という商品自体のアイデアも、積極的に考えられる場があります。100円ショップは特にどんどん新商品を出していく業界ですから、全員でアイデアを出していこうというマインドがあるんです。そうしたなかで、デザインやアイデアが形になる瞬間は、やはり大きなやりがいを感じます。また、全国展開している店舗に自分が担当した商品が並ぶので、九州で暮らしている両親や祖父母に、実際に店舗で商品を手に取ってもらえることも、とても嬉しいです！

自分を信じてつくり続けて

日々の業務では、生活者の視点に立った「伝わるデザイン」を追求する一方で、見た目の美しさやブランドらしさといった〝感性〟の力が求められる場面も多くあります。女子美時代、自分の好きなものを大切に、好きなものを隠さず共有し合える環境のなかで過ごしてきたことは、自分の「好き」を見つめることにもつながったと思います。好きなもの、好きなことを突き詰めている人たちが周りにたくさんいたからこそ、じゃあ自分の「好き」ってなんだろう?と、自然と考えさせられていました。他人の正解を気にせずに、自分を信じてつくり続けることができた女子美での4年間で、独自の視点をつくり、独自の切り口で考える発想力を育むことができました。それが、今の私の強みでもあります。
就職活動は「なりたい自分」に近づくための大切なプロセス。皆さんも自分らしい視点や表現に自信を持って、妥協をせずに突き進んでください！

採用担当者の声

ものづくりに集中できる環境で。

レック株式会社　総務部
中村晏子 さん

当社は、常時10,000点以上の商品を取り扱う総合メーカーです。毎年1,000点以上の新商品をリリースしていますが、日用品や家庭用品など身近な商品が多いため、自分の考えたアイデアを商品化しやすいのも魅力です。特に静岡企画部は、工具室や塗装室など設備が充実しており、ものづくりに集中できる環境が整っています。自由でオープンな空気感に、どこか美大の延長のような雰囲気を感じていただけるかもしれません。
静岡企画部は、ほとんど美大出身者が占めていますが、女子美出身の方も多く在籍しています。採用では、作品はもちろんですが、人柄も重視しています。好奇心や発想力、そして前向きで素直な気持ちを持った皆さんと出会えることを、楽しみにしています。

Text 株式会社TURBAN　Photo 渡辺一城

本学ヴィジュアルデザイン専攻教授の林規章先生が第27回亀倉雄策賞を受賞しました

本学芸術学部デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻教授の林規章先生が手がけた、本学大学院・専攻科・3年次編入学ポスターが、日本グラフィックデザイン協会（JAGDA）が発行している年鑑『Graphic Design in Japan』応募作品の中から、年齢やキャリアを問わず、最も輝いている作品とその制作者に贈られる亀倉雄策賞を受賞しました。年鑑発行にあわせた作品展および受賞を記念した展覧会も開催予定です。

Photo: Ryu Tamagawa

林 規章

芸術学部 デザイン・工芸学科
ヴィジュアルデザイン専攻 教授

大学院美術研究科 デザイン専攻
ヴィジュアルデザイン研究領域 教授

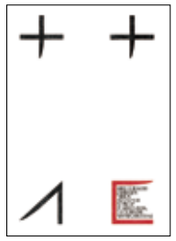
（はやし・のりあき）1964年岐阜県生まれ。主な仕事：BNN新社「ブルーノ・ムナーリの本たち」、「ウィム・クロウエル見果てぬ未来のデザイン」、金の星社／NHK「デザインあ みるほん」のブックデザイン、MTV JAPAN「VMAJ 2018～2023」のブランディング、広告のアートディレクション、グラフィックデザインの分野に従事。主な受賞：NY. ADC特別賞、JAGDA新人賞、The One Show Design GOLD、東京ADC賞、東京TDC賞などがある。

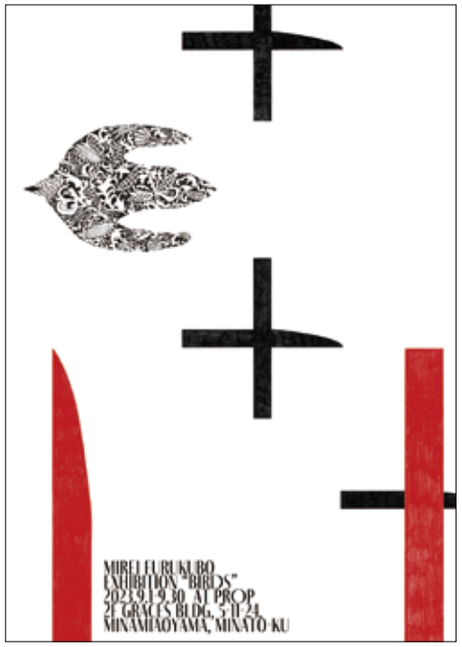
第27回亀倉雄策賞
https://www.jagda.or.jp/awards/kamekura/

本学卒業生が2024年度ADC賞を受賞

本学卒業生の柴谷麻以さんがアートディレクター、野島三奈子さんがクリエイティブプロデューサーを務め、同じく卒業生でアーティストの古久保美玲さんの個展『BIRDS展―花と鳥―』のポスターが、2024年度ADC賞を受賞しました。

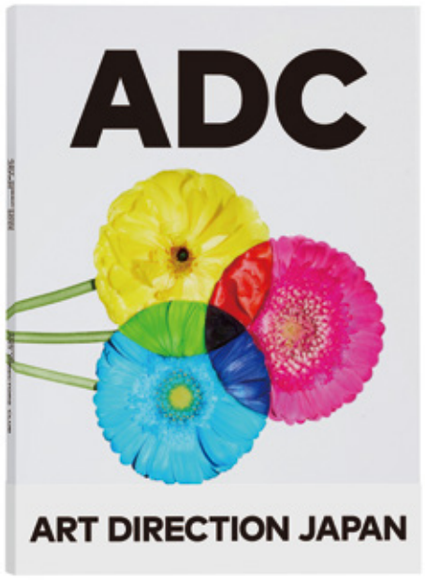
また、本作品を含め、年度の優秀な日本を代表するアートディレクション作品をまとめたデザイン書『ART DIRECTION JAPAN / 日本のアートディレクション』の2024年度版のデザインを本学客員教授の吉田ユニ先生が手がけています。





本学客員教授の吉田ユニ先生が『ART DIRECTION JAPAN / 日本のアートディレクション 2024』のデザインを手がけました

本学客員教授でアートディレクターの吉田ユニ先生が、東京アートディレクターズクラブ（ADC）が毎年発行している、年度の優秀な日本を代表するアートディレクション作品をまとめたデザイン書『ART DIRECTION JAPAN / 日本のアートディレクション』の2024年度版のデザインを手がけました。



本学卒業生の宮本華子さんがＶＯＣＡ賞を受賞しました

宮本華子さん（本学大学院美術研究科博士前期課程（洋画）修了／２０２４年度 JOSHIBI AIRプログラム参加）が、上野の森美術館で開催中のＶＯＣＡ展２０２５にて、最高賞である「ＶＯＣＡ賞」を受賞しました。

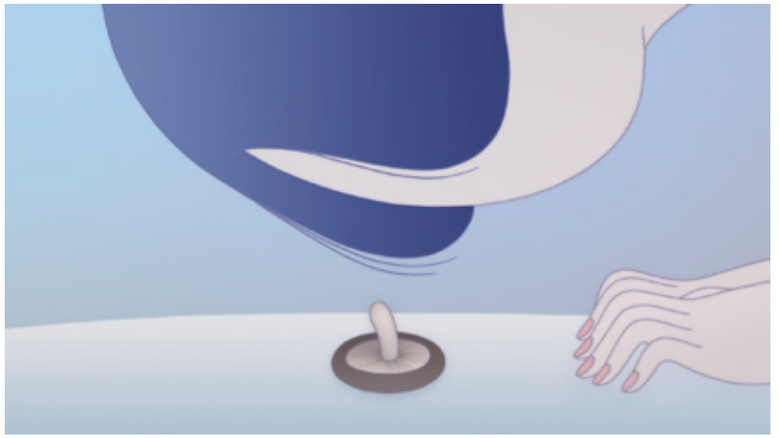
「ＶＯＣＡ展２０２５ 現代美術の展望 ―新しい平面の作家たち―」（主催：公益財団法人 日本美術協会 上野の森美術館／特別協賛：第一生命保険株式会社）は、全国の美術館学芸員や研究者などに40歳以下の若手作家の推薦を依頼し、その作家が平面作品の新作を出展することで、毎年全国各地から未知の優れた才能を紹介している現代美術展です。32回目の開催となる本展では、延べ１０６８組（１０７９名）の作家が出展し、見事宮本さんが「ＶＯＣＡ賞」受賞となりました。

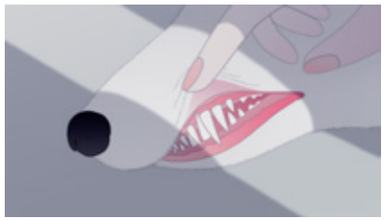
今回の受賞は、女子美術大学卒業生として初であり、そして映像を組み合わせた作品での受賞はＶＯＣＡ展史上初の大変素晴らしい快挙となりました。

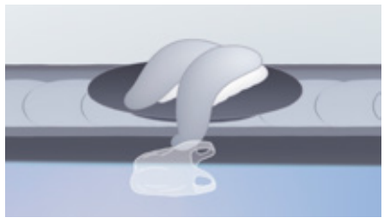
撮影：上野則宏

本学卒業生の水尻自子さん監督作品が、第75回ベルリン国際映画祭で銀熊賞（審査員賞）を受賞しました

本学芸術学部デザイン学科卒業生で、映像作家の水尻自子さんが監督を務めたアニメーション作品『普通の生活』が、第75回ベルリン国際映画祭の短編コンペティション部門にて銀熊賞（審査員賞）を受賞しました。







『普通の生活』©Miyu Productions, New Deer

「神ゲー創造主エボリューション２０２４」にて在学生がグランプリ受賞

本学芸術学部アート・デザイン表現学科メディア表現領域４年生の大塚こむぎさんと、美術学科立体アート専攻４年生の石原菜乃子さんのグループ「ビューティーズINFINITY」が制作したゲーム作品『吉見くんはゲームばっかり』が、ＮＨＫエンタープライズ主催、一般社団法人コンピュータエンターテインメント協会※を重ねて2次審査も通過、35作品のファイナリストとして選ばれ3次審査（最終審査）に臨みました。最終審査は２０２４年12月14日と15日に、原宿での展示と公開番組収録のスタイルで行われました。応募作品数は６００以上（人数にして２８００人以上）の中、『吉見くんはゲームばっかり』は、3つの審査委員賞、優秀賞、そしてグランプリ神ゲー大賞を受賞しました。また、コンテストの様子が、ＮＨＫにて放映されました。

※一般社団法人コンピュータエンターテインメント協会（CESA）は、健全にゲームを遊ぶための研究・啓発活動、各種ガイドラインの策定、ゲーム白書の発刊などを行い、東京ゲームショウや開発者会議などを開催する日本のゲーム業界をまとめている団体です。

「神ゲー創造主エボリューション2024」WEBサイト

共創デザイン学科主催
日本デザイン振興会寄附講座が開講されました

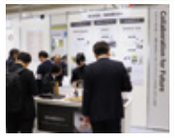
秋元 淳 先生

押切道子 先生

長谷川 駿 先生

2月16日杉並キャンパスにて、日本で唯一の総合的なデザイン評価・推奨の制度である「グッドデザイン賞」を運営する日本デザイン振興会の寄附講座を開講しました。本寄附講座は、公益財団法人日本デザイン振興会が保有するデザインに関するリソースを活用した講座の実施により、教育分野へのデザイン関連カリキュラムの導入とその充実化を促進し、デザインに関わる人材の育成や社会的リテラシーの向上を目的としています。今回は共創デザイン学科特別講座として、本学科に在籍する1～2年生に加えて、2025年度の新入生を対象に実施いたしました。講座前半では、同振興会の秋元 淳先生より、グッドデザイン賞の創設時から近年までの受賞作品をもとに、「個」の困りごとから「社会」の課題解決へ、「目に見えるモノ」から「目に見えないコト」まで、拡大するデザイン領域についてご講義いただきました。講座後半では、「2024年度グッドデザイン賞金賞」受賞、および「みんなの選んだグッドデザイン」に選出された、多世代共生の複合型福祉施設『深川えんみち』を運営されている押切道子先生（NPO法人 地域で育つ元気な子 理事長）、そして、建築設計された長谷川 駿先生（JAMZA一級建築事務所 共同代表）に構想から達成、そして、現在の運営の状況など人々が共創していく新しいデザインのあり方についてご講義いただきました。講義後の質疑応答では、デザインをする上での必要な考え方や、目に見えないコトというデザインの発信方法、今後のプロジェクトの展開など、聴講していた学生から多くの質問が寄せられ、他では聞くことができない大変貴重な講座となりました。

多世代共生の複合型福祉施設
『深川えんみち』



共創デザイン学科の学生提案作品が 3DECOtech 2025で展示されました

1月29日～31日東京ビックサイトにて、意匠と機能を融合し新しい価値を生み出すことを目的とした「加飾技術」の専門展『3DECOtech』が開催されました。この展示会の出展企業の1つである株式会社東海理化のブースで、本学共創デザイン学科の学生提案作品が展示されました。

「Collaboration for Future」の企画名のもと、デザイン系大学と東海理化の新素材「BAMBOO+」を掛け合わせ、サステナブルな未来に向けた提案が、2024年秋ごろよりコンペ形式で行われました。4大学から21案が集まり、厳正な審査の結果、本学共創デザイン学科学生 鈴木侑己菜さんのアイデアが見事選出され、出展作品3つのうちの1つとして展示される運びとなりました。鈴木さんはBAMBOO+合皮の風合いを活かした、環境に優しく、丸めたら竹になるユニークなペンケースを提案しました。同社員の方からは、「丸めることで竹になるアイデアが非常に面白く、BAMBOO+との相性も高く、良いブランディングとなっている」と評価されました。ブースには多くの来場者が集まり、賑わいを見せました。

また1月30日には、共創デザイン学科准教授の唐見先生が、同展示会のセミナーに登壇。「CMFデザインが商品に与える影響力と、素材の価値」の講演を行いました。CMFデザインの基本から商品開発との関係、CMFデザイン開発を行うにあたっての必要な視点などについて説明しました。セミナーには多くの人が聴講し、講演後も聴講者との交流が行われるなど、盛況のうちに幕を閉じました。

共創デザイン学科の学生のデザインが 芙蓉総合リース自動運転EVバスの オリジナルラッピングコンペにて採用されました

大学全体の学生に向けて募集を行った、芙蓉総合リース株式会社が主催する自動運転EVバスのオリジナルラッピングコンペで、共創デザイン学科1年の坂本 楓さん・2年の嶋﨑帆南さんの作品が採用されました。

学生は、①サステナビリティ（EV導入による持続可能な社会への貢献／誰もが自由に移動できる持続可能なまちづくりへの貢献をアピールできるデザイン）、②次世代モビリティ（自動運転バスがまちを走り、未来を感じてもらえるようなデザイン）の2つのデザインコンセプトを踏まえ自由にアイデアを提案しました。2025年3月10日には、自動運転EVバスの試乗会として、学生のデザインが施された車両が女子美術大学の相模原キャンパスにてお披露目されました。

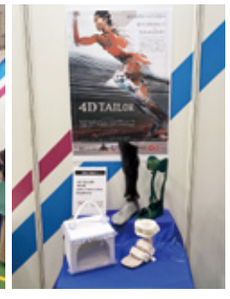
坂本 楓さん（写真左）
次世代モビリティである自動運転EVバスに、ビルと木をメインで配置して、人間も自然も持続して共存できるサステナビリティを表現しました。その街並みをこのバスが走ることを想像しながらデザインしています。サステナブル＝地球のイメージから青と緑の爽やかな色合いでまとめることで、これからの明るい未来を感じさせるようにしました。新しい時代の幕開けをイメージして、背景を早朝の空のような色合いを表現しています。サステナビリティ＝持続可能性なので、「循環」をイメージして白い円弧を背景に配置しています。

嶋﨑帆南さん（写真右）
サステナブルと次世代モビリティというコンセプトから、「進化」をキーワードとして設定しました。周りの色に合わせて常に変わり続けること、視力が良いためずっと続く未来を見ることができることから、カメレオンを具象的なモチーフとして制作しました。反対に周りにある線は自然を抽象的に表しているデザインです。カメレオン自身が吸収した色を自然に分け与えるサステナブルなストーリーを表現しています。乗る人が誰でもワクワク感を感じられる色味としてハッキリとしたカラーを使用しています。

共創デザイン学科の学生が義肢装具のデザイン提案で 「エコプロ展2024」「WELL-BEING TECHNOLOGY 2025」に出展しました

本学の産官学連携プロジェクトの一環として、共創デザイン学科の学生が、株式会社LUYLと協力し、義肢装具の新たなデザインを提案、2024年12月に「エコプロ展2024」、2025年1月に「WELL-BEING TECHNOLOGY 2025」の超福祉ブースに提案モデルを出展しました。

義肢装具とは病気や怪我などにより手や足などの体の部位に、痛み・損傷・麻痺など生じたときに、治療や症状軽減を目的として装着する器具を指します。本プロジェクトでは本学共創デザイン学科の学生が、若い女性をターゲットとした装具の新たなデザインを提案しました。実際に装具利用者向けの靴を製造、販売している株式会社LUYLから利用者の実態を伺ったり、装具を製造している会社への見学などを行なったりしながら「装具利用者にとっても好みのデザイン」をそれぞれ検討し試作を行いました。また、プロジェクトメンバーの学生が「渋谷のラジオ シブコネ」の「超福祉ラジオ」のコーナーに出演し、展示作品について説明を行いました。



2025年日本万国博覧会にて本学名誉教授の橋本弘安先生によるワークショップを開催

学術交流協定校であるOCAD大学（カナダ）より、2025年日本万国博覧会（略称「大阪・関西万博」）での天然顔料普及のためのワークショップ実施の連携・協力の依頼があり、5月2日～4日の3日間、大阪・関西万博のクラゲ館にて、橋本弘安名誉教授（染織文化資源研究所客員研究員）を中心に、カナダ・オンタリオ湖やナイアガラの滝の石を天然顔料とした絵の具で、団扇に絵を描いたり、靴紐を染めたりするワークショップ「サブミクロン天然顔料の革新的な世界」を実施しました。大阪・関西万博のテーマである「未来のための文化の共創」に共鳴するサステナブルな天然顔料の研究を、芸術を通して楽しさとともに多くの方へ伝えることのできる貴重な機会となりました。

また、5月2日には、カナダ・パビリオンにて、本学所在地：相模原市の姉妹都市であるトロント市と、OCAD大学と女子美術大学間の継続的コラボレーションを祝うセレモニーも実施され、OCAD大学より連携協力のお礼として、本学および相模原市へ天然顔料を使用した作品が贈呈されました。また、大阪・関西万博においては、ポーランド館でも同ワークショップが4月、9月に行われ、NPO法人富士山からはじまる天然顔料と粉砕の研究会との協働のもと、世界から先駆的な研究として歓迎されています。

JOSHIBI AIR｜大阪・東京でAIR Network Meeting を開催

アーティストやクリエイターが普段とは異なる場所に滞在しながら、制作やリサーチ、発表などを行うアーティスト・イン・レジデンス（AIR）は、国内外に点在しており、本学も2022年度からJOSHIBI AIRを実施しています。この度、5月24日に大阪・関西万博のオランダパビリオンにて「第3回 AIR NETWORK MEETING 大阪・関西万博大会」（主催：AIR Network Japan、共催：オランダ王国大使館、女子美術大学）、そして会場を東京に移し5月28日「Y-AIR Network Meeting — AIR for Young：若手アーティストのための“組織とネットワーク”」（主催：女子美術大学、共催：Impact HUB Tokyo）を開催し、国内外から多くの方にご参加いただきました。2つの会合では、AIRやネットワークの運営者をお招きし、JOSHIBI AIRも含めた各団体の活動事例の紹介やディスカッション、交流会などを通して、非常に有意義な意見交換の機会を持つことができました。今後も、学生の卒業後における国際的なキャリア支援や、アートシーンへの貢献を目指し、AIRや異文化への理解を深め、多様性が尊重される社会の形成に寄与します。

大賞　松本 慧さん「CHILD DREAM」

新校舎の共用空間の利用アイデアコンペを実施

現在建設を計画している杉並キャンパス新校舎の中心となる吹き抜け共用空間について、「躍動する空間」をテーマに展示や憩いの場を作るためのアイデアを学生から募集するアイデアコンペティションを実施しました。応募した9組の学生には新校舎の設計を監修するマーラ・セルベット客員教授によるレクチャーや中間講評が行われ、最終講評会では受賞作品の発表が行われました。

大賞	松本 慧（博士前期課程 メディア研究領域 1年）
セルベット賞	大木姫里（デザイン・工芸学科 環境デザイン専攻 1年）
横山賞	山﨑愛華・ザモラシッジャー しきぶ（アート・デザイン表現学科 スペース表現領域 1年）
西田賞	横山莉々・岸 真優奈（デザイン・工芸学科 環境デザイン専攻 1年）
奨励賞	倉澤美昊・野村咲香（アート・デザイン表現学科 スペース表現領域 1年）
佳作	紙野ゆう（アート・デザイン表現学科 ヒーリング表現領域 4年）
佳作	村山心菜（共創デザイン学科 2年）

NEWS — & — TOPICS

01 本学の学生が神奈川県相模原市「南区誕生15周年記念ロゴマーク」をデザインしました

相模原市南区15周年記念のロゴマークをヴィジュアルデザイン専攻3年の吉田真菜さんがデザインしました。昨年10月に相模原市南区からロゴマークデザインを本学のデザインルーム※に依頼があり、デザインルームに所属する学生3名（吉田真菜さん、安間千春さん、西坂友希さん）がデザインをしました。3名がデザインしたそれぞれのロゴマーク1点をオンラインにて相模原市民等に投票を募り、得票数の多かった吉田真菜さんがデザインしたロゴマークに決定しました。

※学生デザインルームとは、学内外からデザインの仕事を受注し、女子美生スタッフが現役アートディレクターから指導を受けながらデザイン実務を経験する、いわば"学内デザイン事務所"です。

02 成均館大学芸術学部（韓国）と学術交流協定を締結

このたび本学は、2025年2月に成均館大学芸術学部（韓国）との間で学術交流協定を締結いたしました。成均館大学はアジアのトップ大学の一つで、伝統と現代の融合を目指し、創造性を育む教育プログラムを提供しており、絵画、彫刻、デザイン、映像、インタラクティブメディアなど、幅広い分野をカバーしています。今回の協定締結により学生の同大学への協定留学や教育の研究交流が可能となります。今後の教育連携を通じて、両国および両大学間の友好、相互理解がさらに深まり、両大学の教育・研究の高度化が一層促進されることが期待されます。

03 本学学生がパッケージデザインを行った「まちだの駅弁」が販売されました

金子さんデザイン

大江さんデザイン

「まちだの駅弁」は、小田急電鉄町田管区で不定期に行われている地産地消のお弁当を特別パッケージで販売する企画です。第6弾となる今回は「駅からつながる私のまちだ」をテーマにデザインの募集が行われ、本学ヴィジュアルデザイン専攻4年の大江那奈さん、プロダクトデザイン専攻3年の金子和叶さんの作品が採用されました。5月17日に小田急線町田駅で実際に販売され、100食のお弁当が30分ほどで売り切れるなど、好評を博しました。

04 女子美術大学 × ORIHICA 共同開発プロジェクト

本学ファッションテキスタイル表現領域の学生2名が、多様なライフスタイルやビジネスのカジュアル化、健康志向に着目し、ORIHICAと共同で「スポーツ感覚のオフィスカジュアル」を提案。第4弾となる今回は、「ORIHICA フラミンゴパンツ®に合うトップス」をキーワードに、ゴルフウェアから着想を得た「Golf Wear × For the Active Me」と、テニスに触発された「Elegance Motion」の2スタイルを展開。動きやすさと快適さを追求した新オフィスカジュアルです。詳細はORIHICA公式サイトをご覧ください。

https://www.orihica.com/collaboration/?aid=pc_ladies_subbanner_1&amp%3Baid2=contents_collaboration

06 展覧会「デザインあ展neo」に山口レイコ教授が参加しました

4月18日より東京ノードにて開催されている「デザインあ展neo」に、本学芸術学部アート・デザイン表現学科メディア表現領域の山口レイコ教授が参加しました。山口先生は、所属するアートユニット「パーフェクトロン」として本展に参加。会場には、『学童イスのゆめ』や『だれもぶつからない』など、複数の作品が展示されました。

07 SPEED FLAT in ENOSHIMA 2025

未来のものづくりのあり方を考えるプロジェクト「SPEED FLAT」。2016年より行っている本プロジェクトは、社会実装を目指しプロジェクトを実践するためのフィールドとして江の島国際芸術祭に参加しています。本学からは、芸術学部デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻在学生の有志26名が参加。粟辻美早教授・林規章教授・松山智一教授が指導教員となり、「江の島アートフェスティバル」期間中、江ノ島商店街内の店舗にて配布するコースターとバナーを制作しました。プロジェクトのビジュアルは澁谷克彦客員教授が制作しました。

05 川崎市高津区で開催された謎解きまち歩き「たかつひらめき探し隊 ～消えた光のナゾ～」の企画を本学の在学生が担当しました

2024年12月から2025年1月にかけて、謎解きまち歩きイベント「たかつひらめき探し隊 ～消えた光のナゾ～」が開催されました。川崎市市制100周年記念事業として行われていた本イベントは、本学の謎解きサークルMEKI:) が企画を担当。部員の一人が高校時代に高津区で周遊型謎解きを制作した経験が縁となり、今回の依頼につながりました。学生たちは2024年夏頃からこの企画に取り掛かり、謎解きの内容や冊子のデザインを作成しました。このイベントを通して、学生たちは地域社会との繋がりを深め、自らの企画力とデザイン力を発揮する貴重な経験を得ました。

本学相模原キャンパスにて、小中学生対象「桜のスケッチ大会」を開催しました

3月29日、本学相模原キャンパスにて小中学生を対象にした「桜のスケッチ大会 ―女子美でみつけた桜色の時間―」を開催しました。2025年、本学は創立125周年を迎えます。より多くの方に本学の特長や取り組みを知っていただくとともに、美術の裾野を広げていくことを目的に、本イベントを開催する運びとなりました。

本学相模原キャンパスのグラウンドは、桜の木で囲まれており、毎年桜の時期は圧巻の光景となります。桜の空間に包まれながら、そこで生まれる時間を絵に描いてもらうことを予定していましたが、あいにくの雨模様となったため、事前に本学グラウンドに咲いていた桜の枝を教室内に配置する形で実施しました。

「女子美でみつけた桜色の時間」をテーマとし、はじめに堀込幸枝准教授と林航助教より、一般的にイメージする桜色と本物の桜の花の色には違いがあること、それを理解したうえで、制作する際には自分が感じる「桜色」を表現することや、芸術作品を作る際の「時間」の考え方や表現の仕方などについて説明を行い、その後、各教室に分かれて本学教員と学生ボランティア37名からのレクチャーを受けながら、「桜色の時間」をテーマに思い思いの作品を仕上げていきました。

終了後の全体講評では、それぞれの作品を本人からのコメントをもらいながら指導した教員や学生が講評を行い、参加者から「アドバイスを受けて、描き方を工夫できた」「楽しかった」と感想をいただきました。指導にあたった学生にとっても、アドバイスの仕方や生徒との向き合い方で、課題に直面したり良い結果につながったりと多くの経験を得ることのできた貴重な機会になりました。

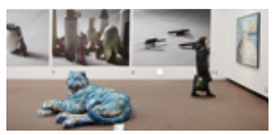
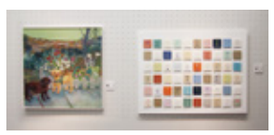
作品は全て女子美アートミュージアムにて展示されました。

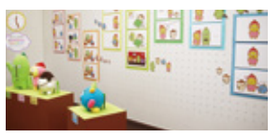
4月13日、本学相模原キャンパスにて授賞式が執り行われ、受賞者には、小倉文子学長より賞状・賞品が贈られました。

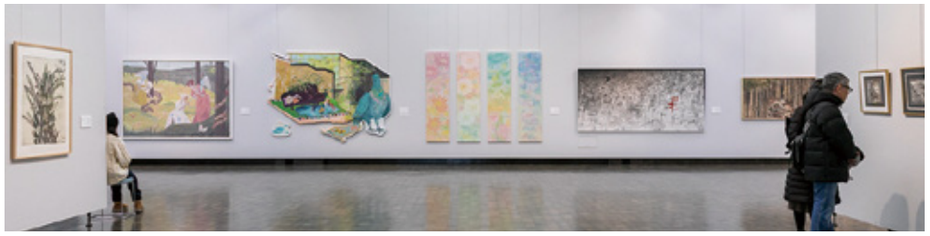
東京都美術館とオンラインにて開催、JOSHIBISION 2024

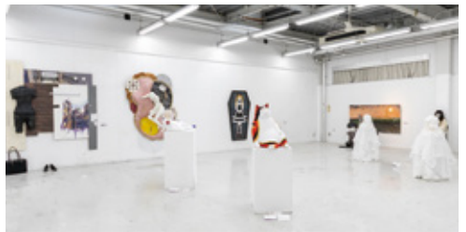
本学大学院・芸術学部・短期大学部の各研究室から選抜された作品、および付属高等学校の卒業制作を一同に展示する「JOSHIBISION2024―アタシの明日―」が2025年3月1日～6日まで東京都美術館にて開催されました。今年で9回目の開催となる「JOSHIBISION」。このタイトルはJOSHIBI×EXHIBITION×VISIONをつないだ造語で「いまを生きる、等身大の学生たちのさまざまな視点が集まり、ともに未来を見つめていこう」というメッセージが込められています。3月4日にはゲスト審査員として、笠原美智子氏（長野県立美術館館長）、サエボーグ氏（現代アーティスト）、澁谷克彦氏（本学客員教授）、説田礼子氏（エルメス財団キュレーター）、手塚千尋氏（株式会社パルコ文化創造事業本部フェロー）をお招きし、1作品ずつ特別賞を選定、講堂にて授賞式を行いました。その後、美術館内のレストランにて、出展学生、審査員、本学の教職員に加え、協定大学や関係企業、美術館・ギャラリーの関係者など、160名以上が集まり、レセプションパーティーを開催しました。出展学生を中心に、アート・デザインを通じて交流を深め、新たな刺激を得る有意義な時間となりました。

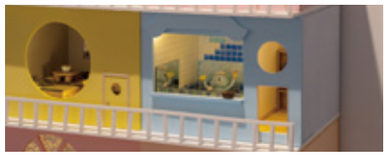
「JOSHIBISION2024 ―アタシの明日―」
オンライン展示
https://joshibision.com/

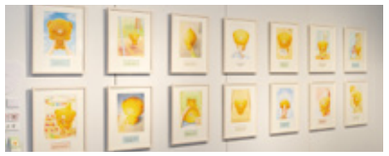
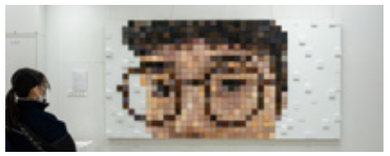



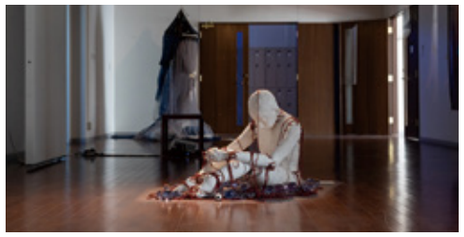










2024年度 卒業制作展／修了制作展 開催

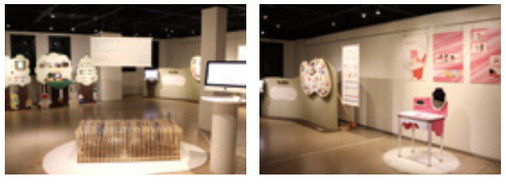
間域日の本学大学院・芸術学部・短期大学部の24年度卒業制作展／修了制作展が杉並と相模原両キャンパスにて行われました。芸術学部と短期大学部は2025年3月8日～10日、大学院の展示は3月8日～16日の期間で開催。杉並キャンパスではスペース表現領域と共創デザイン学科の授業成果展も同時開催されました。4年間、あるいは2年の学生生活の集大成として、それぞれの想いが詰まった力作が多く展示されました。

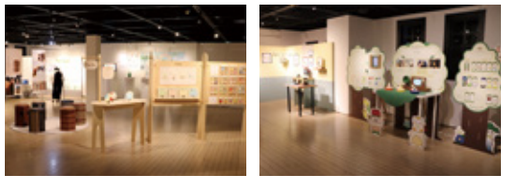
2024年度 学外卒業・修了制作展

2025年1月から各学科・専攻・領域・コースごとに行われました学外での卒業・修了制作展の様子をご紹介いたします。学生生活の集大成である卒業・修了制作を見るために、在学生や保護者、卒業生などが会場を訪れました。

芸術学部 デザイン・工芸学科
プロダクトデザイン専攻
卒業制作展「くくる」

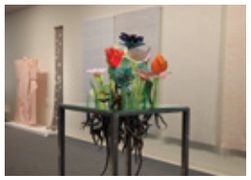
会期：2月12日～2月16日
会場：横浜赤レンガ倉庫（神奈川県横浜市）





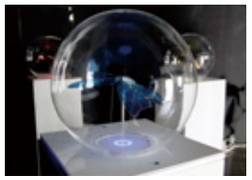
芸術学部 デザイン・工芸学科
デザイン・工芸学科 工芸専攻
卒業・修了制作展2025

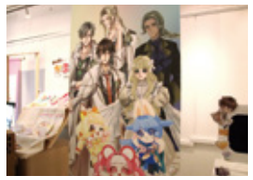
会期：2月7日～2月11日
会場：Spiral Garden（東京都港区）



芸術学部 アート・デザイン表現学科
メディア表現領域
卒業制作有志展「Colorful」

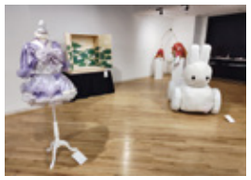
会期：2月14日～2月16日
会場：デザインフェスタギャラリー原宿（東京都渋谷区）

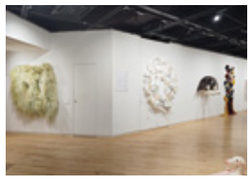




短期大学部 造形学科
デザインコース テキスタイルデザイン
卒業・修了制作学外展

会期：2月13日～2月16日
会場：AXIS GALLERY（東京都港区）



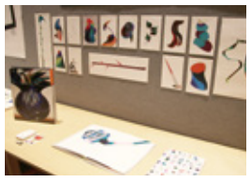


芸術学部 デザイン・工芸学科
環境デザイン専攻
卒業制作展「S=I:ワタシ」

会期：1月26日～1月27日
会場：レンタルスペースさくら　原宿竹下口（東京都渋谷区）

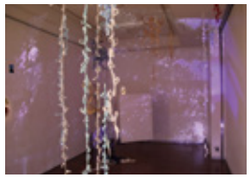
芸術学部 デザイン・工芸学科
ヴィジュアルデザイン専攻
卒業制作展「MIRROR」

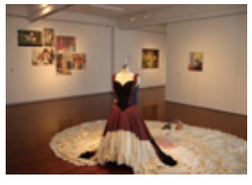
会期：2月7日～2月9日
会場：Laforet Museum HARAJUKU（東京都渋谷区）

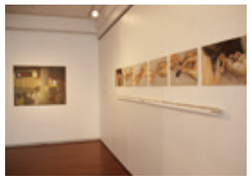


芸術学部 アート・デザイン表現学科
アートプロデュース表現領域
卒業制作・修了研究展「APILOGUE」

会期：1月10日～1月22日
会場：ガレリアニケ（東京都杉並区）

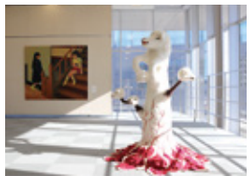


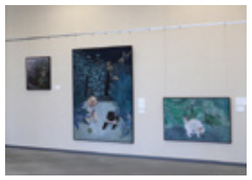


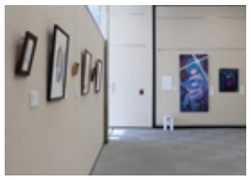


芸術学部 美術学科
美術教育専攻
第10期生卒業制作展「たまゆらの邂逅」

会期：2月5日～2月8日
会場：町田市民ギャラリー（東京都町田市）







女子美術大学美術館賞

修了制作及び卒業制作が優秀な学生に 授与される女子美術大学美術館奨励賞 受賞者の中から1名に「女子美術大学美術館賞」が授与され、賞状と副賞が贈られました。また、選抜作品は女子美術大学美術館に収蔵されます。

『植物の創造』 小島早椰
大学院美術研究科
博士前期課程 美術専攻 工芸研究領域

2024年度 特別賞

順天堂
佐藤志津・小川秀興賞

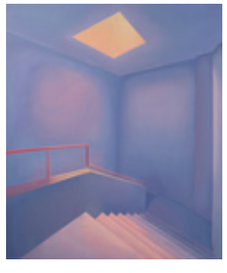
学校法人順天堂と本学は連携・協力に関する協定を締結しており、その一環として2016年度より優秀な卒業・修了制作に対して「佐藤志津・小川秀興賞」を授与いただいております。9回目となる本年度は、洋画専攻の学生1名が受賞し、賞状及び副賞が贈られました。選出された作品は順天堂大学内に1年間展示されます。

『緑溢れる応接間』 大谷真由美
芸術学部美術学科洋画専攻（絵画）

東京理科大学賞

学校法人東京理科大学と本学は連携・協力に関する協定を締結しており、その一環として2015年度より優秀な卒業制作に対して「東京理科大学賞」を授与いただいております。本年度は以下の学生が受賞し、賞状と副賞が贈られました。選出された作品は東京理科大学内に1年間展示されます。

東京理科大学
学長賞



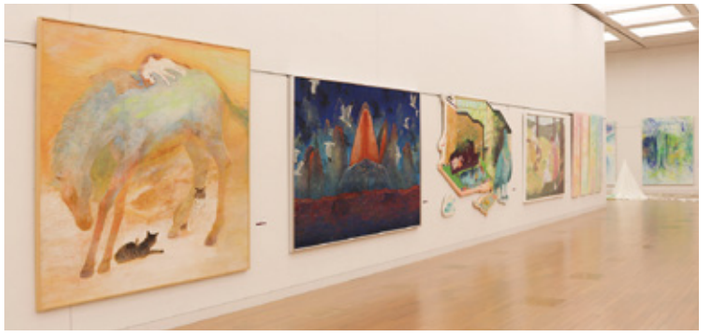
『Chapter8』 石戸利奈
芸術学部美術学科洋画専攻（絵画）

東京理科大学
坊っちゃん賞

『重厚肉桎』 稲田ちり
芸術学部美術学科洋画専攻（版画）

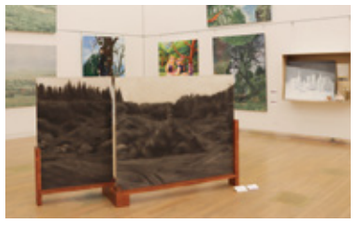
東京理科大学
マドンナ賞

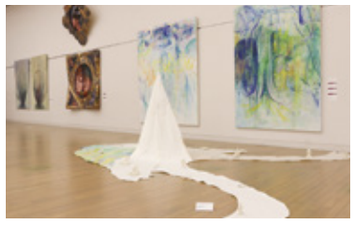
『臓気』 松本夏波
芸術学部美術学科日本画専攻



令和6年度・第48回 東京五美術大学 連合卒業・修了制作展 開催

2025年2月21日～3月2日の休館日を除く9日間に渡り、東京五美術大学（武蔵野美術大学・多摩美術大学・東京造形大学・日本大学芸術学部・女子美術大学）の美術系学科による卒業・修了制作展「東京五美術大学 連合卒業・修了制作展」が国立新美術館にて開催されました。今年は五美大展合同企画として、「話したいこと」をもとに意見交換し合う『学生による、学生のためのラウンドテーブルミーティング』を開催。五美大展に出品している学生に限らず、大学院生から中高生の参加もでき、多くの学生がミーティングに参加しました。五美術大学の作品が一堂に会し、学生たちの交流も深まった展覧会となりました。





展覧会報告

JAM

2024年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展
2025.3.8(土) – **3.16**(日)

2024年度に本学大学院美術研究科を修了する学生が制作した修了制作作品の展覧会で、相模原キャンパス(女子美アートミュージアム)では、洋画、日本画、版画、工芸(染・刺繍・陶)、立体芸術、ヴィジュアルデザイン、プロダクトデザイン、環境デザインの領域を専攻した学生の作品を紹介しました。

女子美の先達たちと女子美染織コレクション展 春の装い
2025.3.25(火) – **4.28**(月)

例年学内向けに開催していた春のコレクション展を、今年度は一般公開。女子美コレクション・女子美染織コレクションからそれぞれ「春」や「花」にちなんだ作品を展示しました。

女子美ガレリアニケ

女子美術大学アート・デザイン表現学科 アートプロデュース表現領域 卒業制作・修了研究展APILOGUE
2025.1.10(金) – **1.22**(水)

アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域4年生、大学院博士前期課程2年生による卒業制作・修了研究展を開催しました。

2024年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展
2025.3.8(土) – **3.16**(日)

2024年度に本学美術研究科を修了する学生が制作した修了制作作品の展覧会。杉並キャンパス(女子美ガレリアニケ)では、メディア、アートプロデュースの領域を専攻した学生の作品を展示しました。

ニケキュレーターズセレクション#09森村智子 −不定形な境界−
2025.5.16(金) – **6.20**(金)

本学卒業の若手アーティストを紹介する展示。本年は、森村智子の作品を紹介しました。

歴史資料展示室

2024年度 新収蔵資料展
2024.9.11(水) – **2025.3.12**(水)

初代校長・藤田文蔵や第一期生・原千代の資料など、2023年度に収蔵した新資料を展示公開しました。

横井玉子生誕170年記念 横井玉子と5人の人物
2025.4.3(木) – **7.19**(土)

本学創立者・横井玉子の生涯と功績を紹介するとともに深い関わりをもった5人の人物を紹介しました。

展覧会予告

JAM

女子美術大学創立125周年記念展 女子美とフランス—もうひとつの日仏交流史
2025.5.29(木) – **8.5**(火)

女子美術大学創立125周年を記念して、フランスに魅せられた卒業生の選りすぐりの作品を紹介します。

第45回 造形「さがみ風っ子展」
2025.10.24(金) – **10.26**(日) ※会期中無休

相模原市内小中学生の造形作品展です。

令和7年度神奈川県高等学校総合文化祭 第72回高等学校美術展
2025.11.27(木) – **11.30**(日) ※会期中無休

神奈川県内高校生の絵画、彫刻、デザイン、工芸、映像メディア、授業作品紹介等の作品をJAM展示室・ロビーのほか、学内の各所に展示します。

2025年度 女子美術大学大学院博士後期課程研究作品発表会
2026.2.12(木) – **2.18**(水)

※開催は学位の申請状況により変更があります

女子美術大学・女子美術大学短期大学部　助手展 2025
2025.9.17(水) – **10.3**(金)

本学各研究室の共同の取組みとして助手による、芸術・デザイン全般にわたる作品・研究成果を展示します。

女子美染織コレクション展PartI3　インドネシアの染織品
[前期] **2025.11.6**(木) – **11.15**(土)

[後期] **2025.12.10**(水) – **12.23**(火)

女子美染織コレクションの中から、インドネシアのバティック、イカットなどの資料を展示します。

2025年度女子美術大学退職教員記念展
2026.1.7(水) – **1.29**(木)

2025年度に本学を定年退職される実技系教員による展覧会です。

2025年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展
2026.3.7(土) – **3.14**(土) ※3月8日(日)特別開館 ※3月12日(木)、13日(金)休館

2025年度に大学院博士前期課程を修了する学生作品を展示します。

女子美ガレリアニケ

女子美術大学短期大学部Ⅰ年前期科目「基礎造形2025」展
2025.7.9(水) – **7.25**(金)

短期大学部1年生が自由選択授業で制作した、13講座の作品を展示します。

2025年度女子美術大学退職教員記念展
2025.11.26(水) – **12.20**(土) ※12月6日(土)、13日(土)休廊

2025年に本学を定年退職される実技系教員による展覧会です。

2025年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展
2026.3.7(土) – **3.14**(土) ※3月8日(日)特別開館 ※3月12日(木)、13日(金)休館

2025年度に本学美術研究科を修了する学生が制作した修了制作作品を展示します。

女子美スピリッツ2025　佐野ぬい展
2025.9.12(金) – **11.1**(土) ※10月11日(土)、18日(土)、28日(火)休廊

1955年に本学洋画科を卒業した佐野ぬいの作品をご紹介します。

アート・デザイン表現学科 アートプロデュース表現領域 卒業制作・修了研究展 2025
2026.1.15(木) – **1.27**(火)

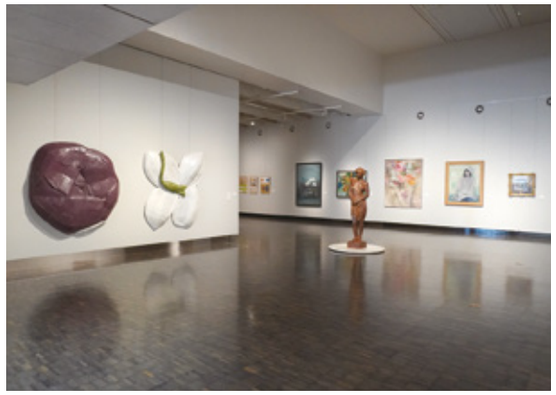
アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域4年生、大学院博士前期課程2年生による卒業制作・修了研究展を開催します。

歴史資料展示室

2025年度 新収蔵資料展　**2025.9.10**(水) – **2026.3.14**(土)　＊休室日 火・日・祝日 年末年始(12月28日～1月5日)　2024年度に収蔵した新資料を展示公開します。

JAM　女子美アートミュージアム展覧会情報

展覧会報告　PICK UP



女子美の先達たちと 女子美染織コレクション展 春の装い

2025.3.25(火) – **4.28**(月)

相模原キャンパス(女子美アートミュージアム)

2001年の開館以降、女子美アートミュージアムでは本学にゆかりの作品はもとより、教育研究資源としての美術品や工芸品、歴史資料など、時代や文化を超えた幅広い分野にわたる資料収集を行ってきました。そうした活動についてお伝えするために、例年学内関係者向けに開催していた、「女子美の先達たちと女子美染織コレクション展」をこの春は一般公開いたしました。

女子美の卒業生や関係の深い作家の作品からなる女子美コレクションとしては、展覧会の副題として掲げた柿内青葉の《春の装ひ》をはじめ、「春」や「花」をモチーフにした絵画・立体・工芸など18点を展示しました。また染織コレクションからも、同じく「春」や「花」をテーマとしながら、日本の打掛・裂のほか、世界中のさまざまな地域・時代における「装い」の資料33点を出展し、女子美アートミュージアムの収蔵品を総覧的にご紹介する展覧会となりました。

柿内青陽《春の装ひ》1929年

《桜花鳳凰模様打掛》江戸時代

甲斐仁代《小菊》1955年

《花果実模様刺繍裂》19-20世紀 トルコ(部分)

女子美術大学広報誌

発　　行　学校法人女子美術大学
〒166-8538
東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集　総務企画部広報グループ
監修担当　佐藤真澄・松山智一
デザイン協力　株式会社 Kitchen Sink.
印　　刷　株式会社ヒーローズ
発 行 日　2025年7月18日

© 2025 学校法人女子美術大学

広報グループでは女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせください。また、本誌の定期購読をご希望の方はお送り先を広報グループまでご連絡ください。

広報グループ
TEL 042-778-6123
E-mail prs@venus.joshibi.jp
URL https://www.joshibi.ac.jp/